寿で暮らす人々　６２

寿ドヤ街とは…番外編…

寿ドヤ街は見る人たちやその立場によりいろんな解釈をされてきました。寿地区近くの商店主さんや中区にある多くの不動産屋さん、タクシーの運転手さんなどから知己にこんなふうに聞くことがあります。突然殴られる、当たり屋がいるなど怖い街だとよく聞かされます。時には「よ」と言う方すらいます。そのほか、前科者が多い、最底辺・最下層の街などです。そんな述べ伝えが続いて「寿地区」のイメージがなんとなく出来てきたのでしょうか。そんなわけで、以前ほどではないけれど転居先のアパートを探す時も、寿に住んでいると知れば断られる場合が往々にしてあります。日常的に悪影響を被ったり、人間性を否定されたりする経験は大なり小なりあるようです。解釈というのは一方的で、強い立場から弱い立場に向けられます。解釈は権力と置き換えることができるでしょう。

さて、まれに、弱い立場から強い立場に向けられる解釈は、風刺と呼ばれて立場の弱い者の知恵と工夫が込められています。「風刺」とは、それが無力であることを承知しています。刀や刃でなく風で刺す。ささやかに溜飲を下げるのです。

寿の街の存在の仕方は、移動人口で維持されて常に流動的です。それは、社会の変化と分かちがたく結びついていることの証でもあります。寿はある人には終の住家であり、一時的な生活の場であったします。

　さて、10年程前、当保育所にコロンビアで長くストリートチルドレンの問題に関わっていらっしゃるパードレ・ニコロ（ニコロ神父）さんがいらっしゃったことがあります。横浜で、全国的な幼児教育集会が開催された時、ニコロ神父が招かれたのです。その集会の実行委員の一人である津守先生から、ニコロ神父を寿福祉センター保育所で招いてみないか、とすすめられ実現したのでした。余談ですが、皆さんはタイのクロントイスラムの幼児教育への傑出した貢献で、アジアのノーベル賞と言われるラモン・マグサイサイ賞を受賞したプラティープ・ウンソンタムさんをご存知ですか。彼女もクロントイスラムで育ちました。30数年前、まだ20代の若々しいプラティープさんが、寿町2丁目にあるファースト横浜バプテスト教会の牧師のご紹介によって、当保育所を見学に訪れたことがありました。子の見学が、彼女のその後の事業にいくばくかの力になっていたら素敵なことですね。寿地区で事業をしていることで意外な方々とのふれあいが実現するのです。

　ニコロ神父の話に戻ります。ニコロ神父は、ストリートチルドレンを対象に幼児から大学教育まで、様々な施設とプログラムを持って運営しています。そのプログラムは活動している中で広がっていったのだそうです。その話の中で印象に残った話がありました。

ニコロ神父の運営する施設の最初のステップは、「24時間出入り自由の施設」だそうです。

そこではどんな子どもも無条件で受け入れます。受け入れる時は衣服を含めすべてを預かります。出たい時はとどまるよう説得はしないで預かった荷物はすべて返します。薬物がある場合はそれだけは返さないと聞きました。うろ覚えなので違っているかもしれません。拳銃だったかもしれません。24時間出入り自由の施設から始まり、幼児教育、中等教育、高等教育、職業教育と年齢や子どもたちの状況にあわせてプログラムを実践していきます。

さて、「24時間出入り自由の施設」、これを聞いて何か思いませんか。そうです。そうなんです。手前味噌かもしれませんが、寿ドヤ街のことです。ここ寿ドヤ街は、簡易宿泊所であるほか規則も強制もありません。24時間出入り自由です。たとえばアルコール依存症の人を例に考えてみましょう。依存症の人に、治療や仕事や自覚を促すなどいろいろな方法やプログラムをすすめます。何度も約束を破られ、プログラム通り進みません。何年もかかるのが普通です。紆余曲折があり、ようやくアルコール専門病院や精神病院や寿アルクにつながります。他の地域では、こういう時間の経過を過ごせるところはほとんどありません。また、アルコールの解毒をドヤ街の中やドヤの一室でする人もいます。

ドヤ街は、アルコール・薬物依存症の方々の治療ルートにつながるまでのプレ施設の役割も果たしているのです。誰でも受け入れる町なので、何度でもやり直し再チャレンジすることができると言い換えることができるでしょう。

さて、また脱線です。薬物依存症の人たちのリハビリ施設として名が知られているDARC（ドラッグアディクション・リハビリテーションセンター、以下ダルクと称す）は、日本で初めての回復した薬物依存症者の近藤さんが運営するナイトケア施設。一日のプログラムの締めくくりは門限10時と定められました。夜の地域のミーティングに出席した後、10時までに「寮」に帰ってくること。しかし誰も約束を守りません。約束を守らせようといろいろな工夫や手段を尽くし努力してみましたが効果は上がりません。そのうち、寮を運営管理する近藤さん自身が、イライラして自分が薬を使いたくなってしまったそうです。危険を感じた近藤さんは、自分のために管理をすることはやめ、規則をなくしたのだそうです。そうしたら、少しずつ個人々々の生活のリズムが出てきて、回復につながる人が出てきたといいます。ダルクは今、法務省・刑務所とのつながりもでき全国に数十の施設を運営しています。薬物依存症の方の再犯率が高いことから、「更生」という意志の力に頼る誤りから、「回復」という正しい治療を受けるという方向で司法関係者とのの協力が進んでいます。

　寿地区自治会の誕生を担った人々のことを書かせていただこうと、街のことを書きだしましたがこんなふうになってしまいました。次回にしたいと思います。悪しからず。

次回　寿地区自治会結成の頃とその人々　その1